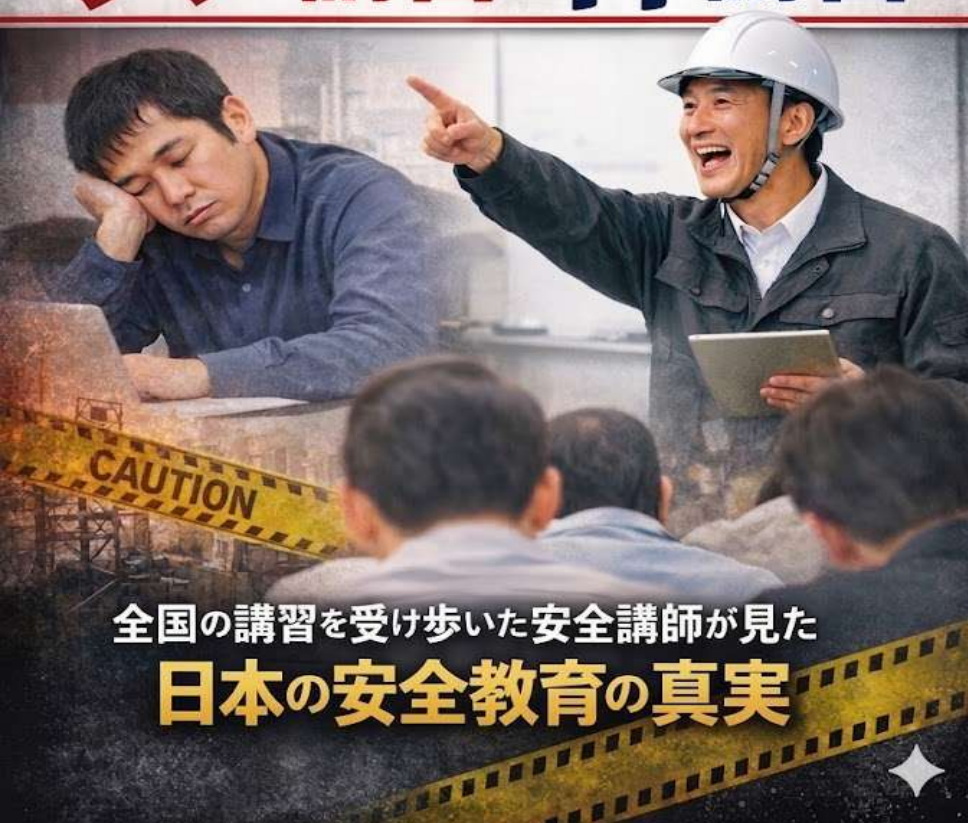


眠る技能講習

A person is shown sleeping at a desk during a training session. The person is wearing a blue sweater and has their head resting on their hand. The background is slightly blurred, showing other people in the room.

ダメ講習と神講習



全国の講習を受け歩いた安全講師が見た
日本の安全教育の真実

眠る技能講習

ダメ講習と神講習

全国の講習を受け歩いた安全講師が見た

日本の安全教育の真実

吉田 峻（よしだ しゅん）

はじめに

眠っているのは受講者ではない

ある日の技能講習の教室でのことである。

講習は午前十時を少し過ぎたころだった。

講師は教壇に立ち、テキストを手に持ち、

淡々と説明を続けている。

しかし教室の後ろの方を見ると、数人の受講者がすでにうつむき始めていた。

腕を組み、目を閉じ、静かに眠りに落ちている人もいる。

前の席でも、ペンを持ったまま手が止まり、

視線は宙をさまよっている。

誰も質問をしない。

誰も笑わない。

ただ時間だけがゆっくりと流れていく。

講師は熱心に説明を続けている。

決して手を抜いているわけではない。

むしろ真面目に講義をしている。

それでも教室は、どこか重たい空気に包まれていた。

私はその光景を、全国各地の講習会場で何度も見てきた。

北海道の教習所でも。

関東の研修施設でも。

関西の講習会場でも。

九州の教習所でも。

そしてあるとき、私は思った。

なぜ技能講習は眠くなるのだろうか。

もちろん、すべての講習がそうではない。

むしろ、まったく逆の講習も存在する。

講師の話に受講者が笑い、

思わず前のめりになり、

真剣にメモを取り、

休憩時間になると講師の周りに人が集まる。

講習が終わったあとも、

「今日の講習は本当に面白かった」

「現場で気をつけようと思いました」

そんな声が聞こえてくる講習である。

同じ技能講習。

同じ法律。

同じ教科書。

それなのに、どうしてここまで違うのか。

私は長年、安全教育の講師として教壇に立ちながら、この疑問を抱き続けてきた。

そして同時に、全国各地の技能講習、特別教育、安全衛生教育を自ら受講してきた。

講師としてだけではなく、

受講者として安全教育を体験するためである。

その数は決して少なくない。

北海道から九州まで、様々な教習機関を訪れ、
多くの講習を受けてきた。

その中で私は、あることに気づいた。

それは、

安全教育には大きな差がある

という事実である。

受講者が眠る講習。

受講者が引き込まれる講習。

私はそれをこう呼ぶことにした。

「ダメ講習」と「神講習」

これは決して、講師を批判するための言葉ではない。

むしろ私は、安全教育に携わるすべての講師に敬意を持っている。

多くの講師が、現場経験を活かし、真剣に受講者に安全を伝えようとしている。

しかし現実として、技能講習制度には一つの特徴がある。

それは、

講師になるために「教育訓練」がほとんど存在しない
という点である。

技能講習講師の多くは、

優れた現場経験を持っている。

しかしそれは必ずしも
「教育のプロ」であることを意味しない。
現場のプロと、教育のプロは違う。
事故を知っていることと、
事故を防ぐ教育ができることは、
まったく別の能力なのである。
だからこそ私は考えた。
もし安全教育の講師が、
「伝え方」を学び、
「教育技術」を身につけ、
「受講者の心を動かす講義」をできるようになれば、
日本の安全教育はもっと良くなるのではないか。
そしてその結果として、
現場の事故を減らすことができるのではないか。
本書は、そのような思いから執筆した。
本書では、私が全国の講習を受け歩く中で見てきた、
・ 受講者が眠る講習の共通点
・ 受講者を引き込む講師の技術
・ 事故を防ぐための安全教育
・ 技能講習制度の構造的課題
について、現場目線で解説していく。
さらに、
講師としてすぐに実践できる

- ・ 講義の作り方
- ・ 受講者を引き込む導入トーク
- ・ 事故を「伝える」ストーリー技術
- ・ 講師としてのセルフチェック

など、**安全教育講師の実践マニュアル**も紹介する。

安全教育の目的は、知識を増やすことではない。

事故を防ぐことだ。

そしてそのためには、

講師が変わる必要がある。

もしあなたが安全教育の講師であるならば、

ぜひこの本を読みながら、自分の講習を振り返ってほしい。

その講習は、

受講者が眠る講習なのか。

それとも、

人の行動を変える講習なのか。

序章

眠る技能講習の衝撃

「技能講習って、正直言って眠いですよね。」

ある受講者が、休憩時間にそう言った。

彼は決して講師を批判しているわけではなかった。

むしろ申し訳なさそうに、苦笑いをしながら話していた。

しかし私は、その言葉に大きな衝撃を受けた。

なぜなら、その受講者はとても真面目な人だったからである。

現場経験も豊富で、講義中も一生懸命メモを取っている。
それでも彼は言った。

「内容は大事だと思うんです。でも、どうしても眠くなってしまうんです。」

この言葉は、技能講習の本質的な問題を表している。

技能講習は法律に基づいた重要な教育である。

多くの労働災害は、正しい知識と安全意識があれば防ぐことができる。

しかしもし、その講習が

受講者を眠らせてしまう講習

になっているとしたらどうだろうか。

知識は頭に入らない。

安全意識も高まらない。
そして講習が終わるころには、
「やっと終わった」
という気持ちだけが残る。
もしそれが現実であるならば、
それは安全教育として非常に大きな問題である。
私は全国の講習を受け歩く中で、
この「眠る技能講習」を何度も目撃してきた。
そして同時に、
受講者が夢中になる講習にも出会ってきた。
その違いはどこにあるのか。
本章では、まず
「眠る技能講習」の特徴
から考えていきたい。

第 1 章

全国ダメ講習ランキング

— なぜ日本の安全講習は眠くなるのか —

安全講習という言葉聞いた瞬間、
多くの人の頭の中に浮かぶイメージがある。

「眠い」

「長い」

「退屈」

「我慢の時間」

これは残念ながら、
日本全国どこへ行っても同じだ。

建設業。

製造業。

設備工事。

解体工事。

どの現場の人に聞いても、
ほぼ同じ答えが返ってくる。

「安全講習？」

ああ、あの眠くなるやつでしょ。」

これは、講師をしている人にとって

少しショックな言葉かもしれない。

しかし、ここで一つ冷静に考えてみてほしい。

安全講習の目的は何か。

資格を取らせることか。

法律を説明することか。

時間を消化することか。

違う。

事故を防ぐこと。

ただそれだけだ。

そして事故を防ぐためには、

たった一つ条件がある。

受講者が内容を覚えていること。

しかし眠っている講習で、

人は何を覚えるだろうか。

答えは簡単だ。

何も覚ええない。

つまり、眠い講習というのは

教育として成立していない。

言い方を変えるなら、

安全講習が退屈であること自体が、安全上の問題なのである。

私はこれまで、

さまざまな講習を見てきた。

自分が講師として立つだけでなく、
受講者として参加したこともある。
そしてあるとき、
心の中でこんなランキングを作るようになった。
それが――

「全国ダメ講習ランキング」

これは特定の誰かを批判するためのものではない。
むしろ逆だ。
多くの講師が、
無意識のうちにやっちゃっている
典型的な失敗パターンを整理したものだ。
もしあなたが講師なら、
このランキングを読むと
少しドキッとするかもしれない。
しかしそれは悪いことではない。
むしろその瞬間こそが、
講習が進化する入り口だからだ。

第5位

パワーポイント朗読講習

講習会場の照明が少し暗くなる。
スクリーンにスライドが映る。
講師が前に立つ。

そしてこう言う。

「それではテキストの 1 ページをご覧ください。」

受講者がページをめくる。

そして講師は読み始める。

そのまま。

ただ読む。

スライドに書いてあることを。

テキストに書いてあることを。

ゆっくりと。

丁寧に。

しかしここで

少し冷静に考えてみてほしい。

それは本当に

講義だろうか。

もし文字を読むだけなら、

動画でもできる。

AI 音声でもできる。

PDF でもできる。

むしろその方が

正確に読めるかもしれない。

では講師の役割とは何か。

それは

「書いてあることを読むこと」ではない。

「なぜそれが大事なのかを伝えること」だ。

人は意味が分からない情報を

記憶することができない。

だから朗読講習では

こういう現象が起きる。

開始 3 分。

受講者の心の声。

「これ…

テキスト読めばよくない？」

開始 10 分。

「スマホ見たい」

開始 30 分。

意識が宇宙へ旅立つ。

これは受講者の問題ではない。

講習の設計の問題だ。

第 4 位

法律条文フルコース講習

この講習の特徴はシンプルだ。

とにかく法律を読む。

「労働安全衛生法第 59 条に基づき…」

「施行令第 20 条では…」

「規則第 36 条では…」

数字。

条文。

条文。

条文。

確かに法律は大切だ。

しかしここで重要なことがある。

受講者は法律家ではない。

現場で働く人が知りたいのは

条文の番号ではない。

どう行動すれば事故を防げるか。

それだけだ。

ところが条文だけ並べられると

受講者の頭の中では

こんな会話が始まる。

「つまり…

どうすればいいの？」

「それって現場で何を変えるの？」

答えが見えない講習は、

脳にとって意味のない情報になる。

人間の脳はとても正直だ。

理解できない情報が続くと、

どうなるか。

思考を止める。

そして思考が止まった瞬間、
講習はただの時間になる。

第3位

事故写真ショック講習

スクリーンに映る事故写真。

壊れた重機。

血のついた作業服。

崩れた足場。

講師は言う。

「皆さん、こうならないように気をつけましょう。」

確かに衝撃はある。

最初は・・・

しかし人間の脳は

すぐに慣れる。

ショックは教育にならない。

なぜなら人は

こう思うからだ。

「これは特別な事故だ」

「自分の現場とは違う」

つまり

自分ごとにならない。

事故防止教育に必要なのは

恐怖ではない。

理解だ。

事故は

突然起きるものではない。

小さな油断。

小さな省略。

小さな慣れ。

それが積み重なったときに

初めて起きる。

しかしショック写真だけでは

そこが見えない。

第2位

眠気耐久試験講習

これは講習というより

ほぼ精神修行だ。

- ・ 声が小さい
- ・ 単調
- ・ 照明が暗い
- ・ 休憩なし（もしくは短い）

そして時計を見ると

まだ2時間ある。

受講者はこう思う。

「帰りたい」
人間は眠いとき
脳の処理能力が大きく下がる。
つまりこの状態で聞いた内容は
ほぼ記憶されない。
しかし問題はそこではない。
もっと深刻なのは
この現象だ。
受講者は
「受講した気になる」
しかし実際には
何も覚えていない。
これほど危険な教育はない。

第1位

試験だけ本気講習

これは全国で非常によくある。
講義は普通。
しかし最後の試験は厳しい。
講師は言う。
「ここ、試験に出ます。」（もしくはここ重要です！）
すると受講者はどうするか。
そこだけ聞く。

つまり講習の目的が
安全理解ではなく
テスト対策になる。
これは教育ではない。
ただのゲームだ。

本当に良い講習とは何か
では
良い講習とは何か。
答えは意外なほどシンプルだ。
受講者が考える講習。
人は
聞いたことは忘れる。
しかし
自分で考えたことは忘れない。
だから講習とは
知識を与える時間ではない。
疑問を作る時間だ。

私の講習では
最初にこう言う。
「今日は眠らせません。」
そして普通の講習では

絶対にやらないことをやる。

最初に試験を見せる。

(本番の試験レベルのサンプル)

受講者は驚く。

「え？まだ習ってないのに？」

そう。

それでいい。

なぜなら

疑問が生まれるからだ。

人間の脳は

疑問があるとき

最も集中する。

つまり講習の役割は

知識の説明ではなく

知りたい状態を作ること。

講習が終わったとき

受講者がこう言うなら

それは成功だ。

「もう終わり？」

時間は同じ。

しかし体感は違う。

なぜなら

脳が動いていたから。

安全教育は

退屈である必要はない。

むしろ逆だ。

命に関わる話ほど

面白く伝えなければならない。

人は

覚えていないルールは守れない。

だからこそ

安全講習の本当の使命は

法律説明ではない。

資格発行でもない。

人の行動を変えること。

それができたとき

初めて講習は

安全教育になる。

第2章

安全教育はなぜ伝わらないのか

日本では毎年、数えきれないほどの安全教育が行われている。

建設業。

製造業。

設備工事。

解体工事。

林業。

全国の講習会場で、毎日どこかで安全教育が行われている。

それにもかかわらず――

労働災害は、なくなるらない。

もちろん減少傾向にはある。

しかしゼロにはならない。

ここで一つ、

とても重要な問いが生まれる。

なぜ安全教育は、現場で活かされないのか。

これは安全教育に関わる人なら、

一度は考えたことがあるはずだ。

講師は真剣だ。

資料も整っている。
法律も説明している。
それでも、
現場に戻ると行動が変わらない。
そして講習の途中では、
こういう光景がよく見られる。
腕を組んでいる受講者。
天井を見ている受講者。
そして——
静かに目を閉じている受講者。
つまり、
寝ている。
これは特定の場所だけの話ではない。
全国どこへ行っても
同じ現象が起きている。
安全教育の現場では、
ある意味で有名な言葉がある。
「安全講習は眠くなる」
これは冗談のように聞こえるが、
実はとても深刻な問題だ。
なぜなら、
眠っている人には教育が届かないからだ。
安全教育の目的は

資格を与えることではない。
法律を説明することでもない。

事故を防ぐことだ。

そして事故を防ぐためには、
たった一つ条件がある。

受講者が
理解していること。

そしてもう一つ。

覚えていること。

しかし人は、
眠りながら理解することはできない。
つまり、

眠くなる講習は、その時点で教育として失敗している。

これは少し厳しい言い方かもしれない。

しかし安全というテーマにおいて、
遠慮は必要ない。

安全教育は
命に関わる教育
だからだ。

受講者はなぜ寝るのか

講習で受講者が寝てしまう理由は
決して「やる気がないから」ではない。

多くの場合、

原因はもっとシンプルだ。

脳が興味を持ってないからだ。

人間の脳はとても正直である。

意味がある情報には集中する。

意味がない情報は遮断する。

例えばこんな講習を想像してほしい。

講師が前に立つ。

そしてこう言う。

「それではテキストの 1 ページをご覧ください。」

受講者がページをめくる。

講師が読む。

テキストを。

そのまま。

スライドを。

そのまま。

淡々と。

ゆっくりと。

ここで受講者の脳はこう判断する。

「これは読むだけの時間だ」

するとどうなるか。

脳は省エネモードに入る。

集中をやめる。

そして――

眠くなる。

これは怠けているわけではない。

むしろ人間の脳としては

正常な反応だ。

つまり講習が眠くなるのは、

受講者の問題ではなく、講義の設計の問題

なのである。

知識と行動は違う

もう一つ、安全教育が伝わらない理由がある。

それは

知識と行動は別物

だということだ。

例えばこういう話がある。

交通安全の講習を受けた人に

こう質問する。

「スピードの出しすぎは危険ですか？」

すると 100 人中 100 人が答える。

「危険です」

では次の質問。

「スピードを出したことはありますか？」

ほとんどの人が答える。

「あります」
つまり
危険だと知っているのに
やってしまう。
これはなぜか。
人間は
知っていることではなく
習慣で行動する
からだ。
現場でも同じことが起きる。
ヘルメットは重要だと知っている。
保護具の必要性も知っている。
しかし暑い日になると
外してしまう。
なぜか。
習慣になっていないからだ。
安全教育が本当に難しいのは
ここにある。
知識を伝えることはできる。
しかし
行動を変えることは難しい。
だから安全教育は
「説明」

では足りない。

体験

が必要になる。

安全教育の本当の目的

安全教育の目的は何か。

この質問をすると

多くの人がこう答える。

「事故を防ぐこと」

確かに正しい。

しかし、もう一歩深く考える必要がある。

事故を防ぐために

必要なことは何か。

それは

人の行動を変えること

だ。

人は説明だけでは変わらない。

しかし、

「自分も事故を起こすかもしれない」

と感じたとき、

行動が変わる。

つまり安全教育とは

情報伝達ではない。

意識の変化を起こす教育

なのである。

そしてその瞬間は、

講義の中のほんの一瞬で生まれる。

講師の一言。

現場の体験談。

受講者の共感。

その一瞬で

講習の価値が決まる。

安全教育は

長さではない。

資料の量でもない。

受講者の心が動いたかどうか

それだけで決まる。

全国講習あるある

ここで少し、

全国の講習会場でよく見られる

「あるある」を紹介しよう。

安全講習を受けたことがある人なら

思わず笑ってしまうはずだ。

朝から怒鳴る講師

講習開始 5 分。

講師が突然こう言う。

「おい！寝るなよ！」

まだ誰も寝ていない。

しかし会場は一瞬で

重い空気になる。

怒鳴ることで

緊張感は生まれる。

しかし同時に

受講者の心は閉じる。

教育は恐怖では続かない。

事故自慢講師

このタイプの講師は

事故の話が好きだ。

「昔なあ、俺の現場でな…」

そこから始まる

武勇伝。

しかし途中で

受講者は気づく。

安全の話ではなく、ただの昔話

であることに。

スライド地獄

スクリーンに映る

大量の文字。

小さい文字。

びっしり。

そしてページは

まだ 100 枚ある。

受講者はこう思う。

「これは…長い」

ダメ講師チェックリスト

あなたの講義は大丈夫だろうか。

次のチェックリストを見てほしい。

もし3つ以上当てはまったら

要注意だ。

- ☐ テキストを読むだけ
- ☐ テキストを受講者に読ませる
- ☐ 自慢話が多い
- ☐ 受講者を見ない
- ☐ スライドが文字だらけ
- ☐ 質問をしない
- ☐ 実体験が少ない
- ☐ 同じ話を毎回している

講義とは

話すことではない。

伝わることだ。

神講師の特徴

では逆に、
受講者から「また聞きたい」と言われる
神講師にはどんな特徴があるのか。
それは意外とシンプルだ。

現場体験談

リアルな話は強い。
なぜなら
受講者が自分の現場を想像できるから。

ストーリー

人はストーリーで覚える。
法律の条文よりも
一つの体験談の方が
長く記憶に残る。

受講者を巻き込む

質問。
会話。
リアクション。
講習が
参加型

になった瞬間、
眠気は消える。

安全教育は変えられる

ここまで読むと
こう思うかもしれない。
「安全講習って難しい」
確かに簡単ではない。
しかし
変えることはできる。
ほんの少し
講義の作り方を変えるだけで、
受講者の反応は
劇的に変わる。
そして講習が終わったとき
受講者がこう言う。
「もう終わり？」
その講習は成功だ。
時間は同じ。
しかし体感は違う。
なぜなら
脳が動いていたから。

第3章

「安全講習は、なぜ“つまらない”のか」

日本には、数えきれないほどの安全講習が存在している。

フォークリフト。

玉掛け。

高所作業車。

石綿。

フルハーネス。

刈払い機。

酸欠。

足場。

現場で働く人なら、

一度は受けたことがあるはずだ。

しかし――

講習が終わったあと、

受講者の心に残るものは何だろうか。

知識だろうか。

危機感だろうか。

それとも、命を守る意識だろうか。

残念ながら、多くの場合、

残るのはたった一つ。

「眠かった」

それだけだ。

日本の安全講習の最大の問題

安全講習の最大の問題は、

「安全を教えていない」

ということだ。

驚くかもしれないが、

これは事実である。

多くの講習は、

- ・ 法律を読み上げる
- ・ テキストを読む
- ・ スライドを流す

ただ、それだけだ。

つまり、

情報を読み上げているだけ

なのである。

しかし、人間の脳は

「読み上げ」を聞くだけでは

ほとんど記憶に残らない。

心理学では、

人は聞いた情報の約 70%を 24 時間以内に忘れる

とされている。

つまり――

講習が終わった翌日には、

ほぼ全部忘れている

可能性が高い。

これで安全が守れるだろうか。

答えは、言うまでもない。

現場の人はバカではない

講習をする側が、

よく勘違いしていることがある。

それは、

「現場の人は勉強が苦手」

という偏見だ。

確かに、

難しい法律用語や専門用語は

馴染みがないかもしれない。

しかし――

現場で働く人は、

とんでもなく頭がいい。

なぜなら、

- ・ 機械の音の違いで異常を察知する
- ・ 数ミリのズレで危険を判断する
- ・ 経験で事故を予測する

これは、
高度な判断力
がないとできない。
つまり、
現場の人は
理解力が低いのではない
ただ単に、
講習が分かりにくいだけ
なのである。

つまらない講習の特徴
全国の講習を見ていると、
共通する特徴がある。
それは、次の5つだ。

① テキスト朗読講習

テキストをそのまま読む。
「労働安全衛生法第〇条により…」
受講者の頭の中はこうなる。
(早く終われ)

② スライド読み上げ講習

スライドを読むだけ。
受講者はこう思う。

「それ、読めばいいじゃん」

③ 経験ゼロ講師

現場を知らない講師。

これが一番危険だ。

例えば、

高所作業の講習で

「落ちないように注意してください」

と言うだけ。

現場の人は心の中で思う。

「それができたら事故起きねえよ」

④ 質問できない空気

講習の途中で質問すると、

「それは後で」

そして結局、

後でも答えない

⑤ 事故のリアルがない

事故の話がない。

しかし、

人間が一番学ぶのは

失敗の話

である。

人は「怖い話」で覚える

人間の脳は、

危険情報

を強く記憶する。

だからこそ、

安全教育には

リアルな事故の話

が必要なのだ。

例えば、

「高所作業は危険です」

と言われるより、

「高さ 6m から落ちて

腰の骨が粉碎して

一生歩けなくなった人がいます」

と言われた方が

圧倒的に記憶に残る。

これは、

脅しではない。

現実だ。

安全講習は「命の授業」

安全講習は、
ただの資格講習ではない。
ただの座学でもない。

命を守る授業

である。
事故は、
一瞬で起きる。
しかし、
その一瞬の事故を防ぐために

講習が存在する

のだ。
だからこそ、
講師は
ただ説明する人ではなく

命を守る伝達者

でなければならない。

筆者の講習が違う理由

ここで少しだけ
話を変えよう。
この本を書いている
筆者の講習は、

普通の講習とは

少し違う。

いや——

かなり違う。

受講者はこう言う。

「時間があっという間だった」

「こんな講習は初めて」

「もっと早く受けたかった」

なぜか。

理由はシンプルだ。

現場の言葉で話す

からである。

法律ではなく、

現場のリアル

を話す。

テキストだけではなく、

経験

を話す。

机の上の理屈ではなく、

現場の命

を話す。

本当に怖いのは「慣れ」

事故の原因で一番多いもの。

それは、

慣れ

である。

- ・ いつもやっているから
- ・ 今まで大丈夫だったから
- ・ 今日でも大丈夫だろう

この油断が、
事故を起こす。

だからこそ、

講習では

危険を思い出させる

必要がある。

安全教育は未来を守る

安全講習は、

ただ資格を取るためのものではない。

家に帰るためのものだ。

現場で働く人には、

家族がいる。

待っている人がいる。

事故で帰れなくなる人を

一人でも減らすために、
安全講習がある。

だからこそ、

講習は

眠くなる授業

であってはならない。

本当の安全講習とは

本当の安全講習とは、
こういうものだ。

受講者が

帰り道にふと思う。

「今日の話、

ちょっと気をつけよう」

その一言が出たとき、
講習は成功だ。

安全教育は、

資格ではなく

意識を変えること

だからだ。

そして次の章では、
さらに踏み込んだ話をする。
なぜ日本の講習は
ここまで退屈になってしまったのか。
その理由を、
遠慮なく、
全部書く。

第4章

「なぜ日本の講習はダメになるのか」

日本の安全講習が退屈になる理由。

これは決して偶然ではない。

むしろ――

構造的にそうになっている。

そして、この構造を知らないと

どれだけ頑張っても講習は変わらない。

まず断言しよう。

日本の講習がダメになる理由は

受講者ではない。

講師でもない。

本当の原因は、

仕組み

にある。

資格講習は「教育」ではなく「制度」

多くの人が勘違いしていることがある。

それは、

安全講習は

「教育」だと思っていることだ。

しかし現実はどう。

安全講習は、

制度

である。

つまり、

法律で決められた

「手続き」なのだ。

例えば、

- ・ 講習時間
- ・ 科目
- ・ 修了試験
- ・ 講師資格

これらはすべて

細かく決められている。

ここまではいい。

問題はその後だ。

制度が厳しくなるほど、

講習は

形式化

していく。

形式化が生む「作業講習」

形式化すると、
講習はこうなる。

「決められた時間をやる」
これが目的になる。

つまり、
時間を消化する講習

になる。
本来の目的は、
安全を理解すること。
しかし、

いつの間にか
時間を終えること

がゴールになる。
これは教育としては
致命的だ。

講師も被害者

実は、
講師もこの仕組みの被害者だ。
多くの講師は、
最初から手を抜こうとして
講習をしているわけではない。

むしろ逆だ。

最初はみんな

やる気に満ちている。

しかし、

- ・時間が厳しい
- ・内容が決められている
- ・脱線できない

こうなると、

だんだんこう思うようになる。

「余計なことは言わない方がいい」

すると講習は

マニュアル化

する。

そして最後には、

テキストを読むだけになる。

受講者の本音

ここで、

受講者の本音を書こう。

これは全国どこでも同じだ。

受講者の目的は、

資格を取ること

だ。

安全意識を高めることではない。

事故を防ぐことでもない。

合格すること

だ。

これは責める話ではない。

なぜなら、

現場では

資格がないと

仕事ができないからだ。

つまり、

受講者も

制度の中で動いている

だけなのだ。

こうして最悪の構図が完成する

ここで

恐ろしい構図が出来上がる。

講師の目的

→時間を終える

受講者の目的

→資格を取る

結果

教育が消える

講習は
ただの
通過儀礼
になる。

それでも事故は起きる
そして現場に戻る。
講習を受けたはずの人が
事故を起こす。
なぜか。
理由は簡単だ。
理解していない
からだ。
いや、
もっと正確に言おう。
覚えていない
のである。
人は、
興味がない話を
覚えなない。
これは当たり前のことだ。

本当に必要なのは「記憶に残る講習」

安全講習に必要なのは
情報ではない。

記憶

である。

受講者が

現場に戻ったとき、

ふと講習を思い出す。

「あ、そういえば講師が言ってた」

その瞬間、

事故は防げる。

つまり、

安全講習は

記憶に残らなければ意味がない

のだ。

では、どうすればいいのか

答えはシンプルだ。

人間の脳に合わせる。

人間が覚えるのは、

- ・ストーリー
- ・感情
- ・驚き

・リアル

この4つだ。

だから講習も

こう変えればいい。

テキスト

→ストーリー

法律

→現場

理屈

→事故

すると、

講習は一気に変わる。

伝説の講習

受講者が帰るとき、

こう言う講習がある。

「今日の話、家族にも言うわ」

この一言が出た講習は、

本物

だ。

なぜなら、

命の話は

人に伝えたくなるからだ。

この本の目的

この本は、
安全講習を否定する本ではない。
むしろ逆だ。

安全講習を救う本

だ。
退屈な講習を
命を守る講習に変える。
そのために、
この本を書いている。

そして次の章では、
安全講習を

劇的に変える方法

を書いていく。
誰でもできる。
しかし、
ほとんどの講師が
やっていない方法だ。

第5章

「受講者が眠らない講習の作り方」

ここからが
本当に重要な話になる。
安全講習を

眠らない講習

にする方法だ。
そしてこれは、
難しい話ではない。

むしろ

シンプルすぎる

くらいだ。
しかし、
ほとんどの講師が
やっていない。
それは、
最初の5分を変える
ことだ。

講習は最初の 5 分で決まる

人間の集中力は、
最初の数分で決まる。
最初にこう思われたら終わりだ。

「つまらなそう」

この瞬間、
脳は

シャットダウン

する。
そして、
講習が終わるまで
ほとんど話は入らない。
だから、
最初の 5 分は
衝撃
が必要だ。

伝説の導入

例えば、
講習の最初にこう言う。
「この講習を受けた人が
3 か月後に亡くなりました」
受講者は

一瞬で静かになる。

次にかう言う。

「理由は、

今日話す内容を

覚えていなかったからです」

この瞬間、

全員の集中力が上がる。

なぜか。

人は

自分の命の話

には集中するからだ。

ストーリーが人を動かす

講習で一番強い武器は、

ストーリーだ。

人間は、

数字よりも

ストーリーを覚える。

例えば、

「年間〇〇人死亡」

よりも、

「昨日、

この作業で亡くなった人がいます」

の方が
圧倒的に記憶に残る。

講習はエンタメでいい
ここで誤解してほしくない。
エンタメとは、
ふざけることではない。

面白くすること

だ。
笑いも大事だ。
驚きも大事だ。
感情も大事だ。
人は、
感情が動くと
覚える。

最高の講習とは

最高の講習とは、
受講者がこう思う講習だ。

「もっと聞きたい」

これが出たら、

その講習は

伝説

になる。

そして次の章では、

講師が

圧倒的にレベルアップする方法

を書いていく。

これは

全国の講師が知れば

講習が変わる。

第6章

「伝説の講師になる方法」

世の中には、
二種類の講師がいる。

「説明する講師」

と

「伝える講師」

だ。
この違いは、
想像以上に大きい。

そしてほとんどの講師は、
残念ながら

説明する講師

で終わってしまう。

しかし本当に事故を減らす講師は、
必ず

伝える講師

である。

説明は頭に入らない

例えば講習でこう言う。

「高所作業では安全帯を使用してください」

これは説明だ。

しかし受講者の頭には

ほとんど残らない。

なぜか。

理由は簡単だ。

当たり前だから

だ。

人間は、

当たりの話を覚えな

伝える講師はこう言う

同じ内容でも

伝える講師はこう言う。

「安全帯をしていなかった人が

目の前で落ちたことがあります」

この瞬間、

受講者の空気が変わる。

さらに続ける。

「高さは6メートルでした」

「地面に落ちた音、

今でも忘れません」
この話を聞いた受講者は
一生忘れない。
なぜなら、
感情が動いたから
だ。

人は感情で記憶する

人間の記憶は、

- ・ 驚き
- ・ 恐怖
- ・ 感動
- ・ 共感

こういう感情と結びつくと
強く残る。

逆に言えば、

感情が動かない講習は
記憶に残らない。

つまり、

事故を防げない
可能性が高い。

伝説の講師の共通点

全国には、
本当にすごい講師がいる。
受講者が

「この講習はすごかった」
と言う講師だ。
そういう講師には
共通点がある。

それは、

現場の言葉で話す

ことだ。

難しい言葉はいらない

講習ではよく
難しい言葉が出てくる。
例えば、

- ・労働安全衛生法
- ・リスクアセスメント
- ・安全管理体制

もちろん大事だ。

しかし、
現場の人にとって
一番大事なものは

今日の作業

である。

だから講習では

こう言った方がいい。

「この作業、

一步間違えると死にます」

これだけで伝わる。

講師は役者である

ここで

少し意外な話をしよう。

良い講師は、

役者

でもある。

と言っても

演技をするという意味ではない。

伝えるために、

声を変える。

間を取る。

表情を使う。

こういう

伝え方

を意識する。

すると、
講習は
一気に変わる。

沈黙の力

講習で一番強い技術。
それは

沈黙

だ。
事故の話をしたあと、
少し黙る。
すると
受講者は考える。
「自分だったら…」
この時間が
安全意識を作る。

講習は命を守る仕事

ここで
一つだけ覚えてほしい。
講師の仕事は、
説明ではない。
命を守ること

だ。

受講者が現場で
事故に遭わないようにする。

それが
講習の目的だ。

本当にすごい講師

本当にすごい講師は、
講習が終わったあと
受講者にこう言われる。

「今日の話、
家で家族に話します」

この言葉が出た講習は、

本物

だ。

なぜなら
命の話は
人に伝えたいからだ。

筆者の講習

この本を書いている
筆者の講習も、
きっと

そういう講習だ。
受講者が
現場に戻ったとき、
ふと思い出す。
「あの講師が言ってた」
その瞬間、
事故は防げる。

伝説の講師とは

伝説の講師とは、
知識が多い人ではない。
話が上手い人でもない。
受講者の
意識を変えた人
だ。

その講習が
一人の命を救ったなら、
その講師は
もう十分
伝説
なのである。

そして次の章では、
さらに踏み込む。
事故はなぜ起きるのか。
安全教育は
本当に事故を防げるのか。
そして、
命を守る教育とは何か
を書いていく。

第7章

「事故はなぜ起きるのか」

事故は、
突然起きるように見える。
しかし実際には、
事故には必ず

前兆

がある。
そしてほとんどの事故は、
予測できた事故
だ。

ハインリッヒの法則

安全の世界で
有名な考え方がある。

1:29:300

これは
ハインリッヒの法則と呼ばれる。
意味はこうだ。

1 件の重大事故の裏には
29 件の軽傷事故があり、

300 件のヒヤリハットがある。

つまり、

重大事故は

突然起きるわけではない

ということだ。

小さな違和感

現場では

よくこういう言葉を聞く。

「ちょっと危なかった」

「ヒヤッとした」

「今のヤバかった」

これが

ヒヤリハット

だ。

実は、

この小さな違和感が

一番重要だ。

事故を防ぐ人

事故を防ぐ人は、

この違和感を

見逃さない。

- ・いつもと音が違う
- ・機械の動きが変
- ・足場が少し揺れる

こういう小さな異常を感じ取る。

これが
プロの感覚
だ。

講習の役割

講習の役割は、
この

危険に気づく力

を育てることだ。
ただ知識を教えるだけでは
足りない。

受講者が
現場で

「あれ？」

と思えるようにする。
それが
本当の安全教育だ。

最後に

安全講習は、
ただの資格ではない。
ただの義務でもない。

命を守る仕組み

だ。
そして講師は、
その仕組みを
動かす人間だ。
だからこそ、
講習には
意味がある。
受講者が
家に帰る。
家族に会う。
それが
安全教育の
本当の目的だ。

第8章

講師の基本スキル

一声・間・話し方・アイコンタクトー

安全講習は、
知識だけでは成立しない。
むしろ講習の質を決めるのは、
知識よりも

「伝え方」

である。
同じ内容でも、
ある講師の講習は
眠くなる。
別の講師の講習は
誰も眠らない。
その違いは何か。

それは、

- ・ 声
- ・ 間
- ・ 話し方
- ・ アイコンタクト

この4つの**基本スキル**だ。
そしてこの4つは、
偶然できるものではない。
実は、
多くの専門分野で
体系的に研究されている技術
なのである。
ここでは、
様々な専門家の視点から
講師に必要なスキルを
徹底的に解説していく。

1 声

一人を引き込む声とは何か—
まず最初に考えるべきは、
声
である。
講習は基本的に
「音声」で伝わる。
つまり、
声が恶ければ
どれだけ内容が良くても
半分以上は伝わらない。

アナウンサーの視点

テレビやラジオのアナウンサーは、
声のプロだ。

彼らがまず教えられるのは、

声は喉ではなく腹で出す

ということ。

腹式呼吸を使うと

- ・ 声を通る
- ・ 疲れない
- ・ 安定する

という特徴がある。

逆に、

喉で話すと

- ・ 声が弱い
- ・ 聞き取りにくい
- ・ 長時間で枯れる

講師は

長時間話す仕事だ。

だからこそ、

腹式呼吸

は基本中の基本になる。

脳科学者の視点

脳科学では、
声の高さが人の印象に与える影響が研究されている。
結論はこうだ。

低すぎる声

→暗く感じる

高すぎる声

→軽く感じる

一番信頼されるのは

中低音の落ち着いた声

だと言われている。

つまり、

講師の声は

落ち着き＋安定

が重要になる。

声のリズム

声にはもう一つ大事な要素がある。

それが

リズム

だ。

ずっと同じトーンで話すと

人は眠くなる。

だから、

- ・強く言う
- ・弱く言う
- ・ゆっくり話す
- ・速く話す

この変化をつける。

これだけで

講習の印象は大きく変わる。

2 間

—沈黙は最強の技術—

次に重要なのが

間

だ。

多くの講師は、

沈黙を怖がる。

だから

ずっと話し続けてしまう。

しかし、

プロの講師は違う。

意図的に沈黙を使う。

舞台俳優の視点

舞台俳優の世界では
こう言われている。

「間はセリフより強い」

例えば

事故の話をしたあと、
3秒黙る。

すると

観客は考える。

「もし自分だったら」

この時間が
感情を動かす。

心理学者の視点

心理学では、
人は

考える時間があると記憶が定着する
と言われている。

つまり、

講習で

少し黙る。

それだけで

理解が深まる。

沈黙は
講師の武器なのだ。

3 話し方

—伝わる構造で話す—

次に重要なのが
話し方

である。

講師の話が
わかりにくい理由は、
知識ではない。

構造

だ。

教育学者の視点

教育学では、
人が理解しやすい話し方は
決まっている。

それは

PREP 法

と呼ばれる。
構造はこうだ。

結論

↓

理由

↓

具体例

↓

まとめ

例えば、

「安全帯は必ず使用してください」

理由

「落下事故の多くは未使用です」

具体例

「実際に 6m から落ちた事故があります」

まとめ

「だから安全帯は必ずつけてください」

この順番にすると

理解しやすくなる。

トップ営業マンの視点

営業の世界では

「ストーリーが人を動かす」

と言われている。

人は

数字より

物語

を覚える。

だから講習でも、

事故のストーリーを話す。

すると、

受講者は

その情景を想像する。

そして

記憶に残る。

4 アイコンタクト

一人は目で聞く一

最後に重要なのが

アイコンタクト

だ。

講習でよくあるのが、

テキストだけ見て話す講師。

スライドだけ見て話す講師。

これは

非常にもったいない。

心理学の視点

心理学では、

人は

見られていると集中する

という性質がある。

つまり、

講師が

受講者を見ると

集中力が上がる。

コミュニケーション学の視点

コミュニケーションの研究では、

人の信頼は

言葉より

視線

で作られると言われている。

講師が

受講者の目を見る。

それだけで

距離が近くなる。

アイコンタクトの技術

ポイントは簡単だ。

一人を見るのではなく、

教室全体を見る。

- ・ 前列

- ・ 中央

- ・ 後列

順番に視線を動かす。

すると

全員が

「自分に話している」

と感じる。

講師の本当のスキル

ここまで

- ・ 声

- ・ 間

- ・ 話し方

- ・ アイコンタクト

を説明してきた。

しかし、

本当に大事なものは

技術ではない。

最後に必要なのは
伝えたいという気持ち
だ。

講師が本気なら
受講者は感じ取る。
逆に、
ただ時間を終えたい講習は
すぐに伝わる。

最後に
講師とは、
ただ話す人ではない。
講師とは、
人の行動を変える人
だ。
そして、
行動が変われば
事故は減る。
つまり、
講師の言葉は
命を守る力を持っている。
だからこそ、
声も

間も
話し方も
アイコンタクトも
磨く価値がある。
その一つ一つが、
いつか
誰かの命を
守るかもしれないのだから。

第9章

最強の講義の作り方

—導入・ストーリー・事故の語り方—

どんな講習でも、
講師が一番悩むのはこれだ。

「どう話せばいいのか」

安全の知識はある。

現場経験もある。

しかし、

講義の作り方

を体系的に教わる機会は
ほとんどない。

その結果、

多くの講習はこうなる。

- ・テキストを順番に説明
- ・スライドを読み上げ
- ・時間が来たら終了

しかし本当に記憶に残る講義は
まったく違う構造で作られている。

最強の講義は、

次の3つでできている。

- 導入
- ストーリー
- 事故の語り方

この3つが揃ったとき、

講義は

「情報」から「体験」へ変わる。

ここでは

様々な専門家の視点から

この3つを解説していく。

1 導入

—講義は最初の5分で決まる—

まず最初に重要なのが

導入

である。

どんな講義でも、

最初の5分で

受講者の集中力は決まる。

これは

教育心理学の研究でも

よく知られている事実だ。

最初の印象が悪いと、

その講義は最後まで
「つまらない講義」
として認識されてしまう。

教育心理学者の視点

教育心理学では、
人の注意は
新奇性（驚き）によって
引きつけられると言われている。
つまり導入には

驚き

が必要だ。
例えば、
「今日は安全講習です」
ではなく、
こう言う。
「この講習を受けた人が
3か月後に亡くなりました」
この一言で
教室の空気は変わる。
なぜか。
人は
自分に関係があるかもしれない話

に強く反応するからだ。

脳科学者の視点

脳科学では、

人の脳は

危険情報に敏感に反応することがわかっている。

これは進化の結果だ。

危険を察知できない人間は

生き残れなかった。

だからこそ、

講義の導入に

危険の話を入れると

脳は

「これは重要だ」

と判断する。

そして

集中力が一気に上がる。

2 ストーリー

一人は物語で理解する一

次に重要なのが

ストーリー

だ。

講義がつまらない理由の多くは、

情報だけ

だからである。

人間の脳は

情報だけでは覚えない。

しかし、

物語になると

記憶が一気に強くなる。

認知心理学者の視点

認知心理学では、

人間の記憶は

次の順番で強くなると言われている。

単語

↓

文章

↓

ストーリー

つまり、

ストーリーは

最も記憶に残りやすい形式なのだ。

映画脚本家の視点

映画の脚本には
基本構造がある。

それは

- 登場人物
- 問題
- 危機
- 結果

この4つだ。

実はこの構造は
講義でも使える。

例えば事故の話。

作業員 A がいた

↓

いつも通り作業していた

↓

安全帯をつけていなかった

↓

落下事故が起きた

こうなると、

受講者は

その場面を想像する。

想像すると

記憶に残る。

トップ営業マンの視点

営業の世界では

こう言われる。

「人は理屈で理解し

感情で行動する」

つまり、

安全講習でも

感情が動かなければ

行動は変わらない。

ストーリーは

その感情を動かす。

3 事故の語り方

—安全講習の核心—

安全講習で

一番重要な部分。

それが

事故の話

である。

事故の語り方で

講習の質は決まる。

しかし、

事故の話には
注意も必要だ。
ただ怖がらせればいいわけではない。

リスクコミュニケーションの専門家の視点

リスクコミュニケーションの研究では、
恐怖だけの情報は
逆効果になることがあると言われている。
なぜか。

恐怖が強すぎると
人はこう思うからだ。

「自分には関係ない」
つまり、

事故の話は

リアルで具体的

である必要がある。

事故の語り方の基本構造

事故の話は
次の順番で話すと効果的だ。

①状況

②油断

③事故発生

④結果

⑤教訓

例えば、

作業員が足場で作業していた

↓

安全帯をつけていなかった

↓

足を滑らせた

↓

6メートル落下

↓

腰を骨折し、現場復帰できなくなった

↓

安全帯は必ず使うべき

この構造だと

受講者は

事故の流れ

を理解できる。

ジャーナリストの視点

優れた記者は、

事実を

具体的に伝える。

例えば、
「事故が起きた」
ではなく
「金属が落ちた音がして、
作業員が動かなくなった」
こういう表現だ。
具体的な描写は
想像を生む。
想像は
記憶を生む。

最強の講義の共通点

ここまで

- 導入
- ストーリー
- 事故の語り方

を説明してきた。

実は、
最強の講義には
共通点がある。

それは、
講義が映画のように進む
ということだ。

導入で興味を引く。
ストーリーで引き込む。
事故の話で考えさせる。
すると、
講義は
単なる授業ではなく
体験
になる。

講義は命を守る
安全講習は
ただの義務ではない。
ただの資格講習でもない。
講義は、
未来の事故を防ぐための時間
だ。
その時間を
退屈なものにするか。
記憶に残るものにするか。
それは、
講師の作り方次第
である。

最後に

最強の講義とは、
知識が多い講義ではない。
受講者が
帰り道でこう思う講義だ。

「今日の話、
ちょっと気をつけよう」
この一言が出たとき、
その講義は
成功している。
そしてその行動が、
いつか
事故を防ぐ。
つまり、
講義とは
命を守る時間
なのだ。

第 10 章

講師の格付け

—あなたは今どのランクにいるのか—

講師という職業には、
実は**明確な階層**が存在する。
しかし、その階層は
資格でも年齢でも決まらない。

- ・ 講師歴
- ・ 保有資格
- ・ 肩書き
- ・ 会社での立場

これらは一切関係ない。
決めるのはただ一つ。

受講者がどう感じているか。

それだけだ。

この章では

教育学者、心理学者、演出家、研修コンサルタントなど
様々な専門家の視点から
講師を 5 段階に格付けする。

- ・ S ランク
- ・ A ランク
- ・ B ランク
- ・ C ランク
- ・ 地獄講師

もしこの章を読んで
自分の位置が見えてしまったら…
それはきっと
講師としての転機になる。

S ランク講師

—伝説になる講師—

(教育心理学者の視点)

S ランク講師は

100 人に 1 人もいない。

この講師の特徴は
講義が終わった後に起きる現象だ。
受講者がこう言う。

「時間が短かった」

これは講義の世界では
最高の褒め言葉である。

なぜなら人間は
つまらない時間は

長く感じる。

面白い時間は

短く感じる。

S ランク講師の講義では
これが起きる。

S ランク講師の特徴

(脳科学者の分析)

S ランク講師は
次の4つを自然に使っている。

1

ストーリー

2

沈黙（間）

3

質問

4

視線

これらが組み合わさると

受講者の脳は

完全に講義モード

になる。

結果として

教室は静まり返る。
誰もスマホを見ない。
誰も寝ない。
全員が
話を聞いている。
これが
S ランク講義だ。

A ランク講師

ープロ講師ー

(企業研修コンサルタントの視点)

A ランク講師は
優秀な講師である。
講義は分かりやすい。
説明も丁寧。
資料も整っている。
受講者の満足度も高い。
しかし
S ランクとの違いが
一つある。
それは
記憶の残り方
だ。

A ランク講義は
「分かりやすかった」
で終わる。

S ランク講義は
「忘れられない」
になる。
この差は大きい。

B ランク講師

—普通の講師—

（教育学者の視点）

日本の講師の
約6割はここにいる。

B ランク講師の特徴。

- ・説明はできる
- ・内容は理解している
- ・資料もある

つまり

普通に講義はできる。

しかし

決定的に足りないものがある。

それは

受講者への意識

だ。

B ランク講師は

こう考えている。

「私はちゃんと説明した」

しかし受講者はこう思っている。

「だから何？」

この温度差が

B ランクの壁である。

C ランク講師

—危険な講師—

（教育心理学の警告）

C ランク講師は

実はかなり多い。

特徴はこうだ。

- ・教科書を読む
- ・スライドを読む
- ・棒読み

講義ではなく

朗読

である。

本人は

講義をしているつもりだが

受講者の脳は
完全に停止している。
心理学ではこれを
受動学習の失敗
という。
つまり
聞いているようで
何も学んでいない。
これは安全講習では
非常に危険だ。

地獄講師

—全国に存在する最悪の講師—

(研修コンサルタントの現場報告)

残念ながら
このレベルの講師は存在する。
特徴はこうだ。

- ・やる気がない
- ・時間を潰す
- ・自慢話
- ・説教
- ・脱線

講義ではない。

時間の浪費である。

受講者は

この講師に出会った瞬間

こう思う。

「今日はハズレだ」

そして

講習全体の評価が

下がる。

これは

会社にとっても

大きな損失

だ。

地獄講師の本当の問題

（組織心理学者の分析）

地獄講師の問題は

本人だけではない。

もっと深い問題がある。

それは

誰も注意しないこと。

講師の世界では

こういう文化がある。

「ベテランだから」

「長年やっているから」
「仕方ない」
その結果どうなるか。
地獄講師は
永久に地獄講師のままである。
これは
教育としては
最悪の状態だ。

ランクは固定ではない
ここで大事なことを言う。
講師のランクは
固定ではない。
変わる。
努力すれば
上がる。
学ばなければ
落ちる。
S ランク講師も
最初は
全員 C ランクだった。
しかし
一つだけ違うことをした。

それは
講義を研究した。
ただそれだけだ。

最後の質問

ここで
あなたに質問する。
あなたは今
どこにいるだろうか。
S ランク
A ランク
B ランク
C ランク
それとも
地獄講師だろうか。
もしこの章を読んで
少しでもなるほど！
もしくは悔しいと思ったなら
それは**講師としての才能だ。**
なぜなら
本当にダメな講師は
この章を読んでも
何も感じない。

第 1 1 章

S ランク講師になるための訓練法

—今日からあなたも伝説になる—

安全教育の現場で、受講者を感動させ、行動を変える講師はごく少数だ。

S ランク講師と呼ばれる人々は、単に知識が豊富なだけではない。

講義の構造、心理学、演出、コミュニケーションのすべてを体得している。

ではどうすれば、あなたも S ランク講師になれるのか？

答えは一つ——体系的に訓練すること。

1. 声と呼吸の訓練（発声専門家の視点）

S ランク講師は、声で受講者の脳を操作できる。

声の大きさ、トーン、速度、抑揚、沈黙。

すべてがツールになる。

訓練方法

- 毎日、1 分間で話す内容を 3 パターン録音し、聴き比べる
- 呼吸を意識し、一息で 3 文話せるように練習

- 重要箇所では一瞬止めて間を作る

「間を制する者は講義を制す」

これは演劇界の格言だが、安全教育でも同じ。

2. アイコンタクトと受講者観察（心理学者の視点）

講師は一方的に話す存在ではない。

受講者の心を読み、行動を引き出す存在でなければならない。

訓練方法

- 講義中、一人ずつの視線を 3 秒間注ぐ練習
- 無表情な受講者には、問いかけ＋視線で反応を引き出す
- アイコンタクトは指導の力を倍増させる武器

受講者がこちらを見返す瞬間、講義は自分事になる。

3. ストーリー構築力（作家・演出家の視点）

S ランク講師は、事故や危険の話を単なるデータとしてではなく、物語として届ける。

訓練方法

- 実際の現場事故を 3 分の物語に変換
- 「導入→葛藤→転換→結末」の流れを意識
- 誰もが共感できる登場人物を設定する

受講者の脳はデータより物語を記憶する。

これを意図的に作れる講師こそ S ランクだ。

4. 実技・体感教育の訓練（現場専門家の視点）

教室の座学だけでは講師として完成しない。

S ランク講師は**現場での体感教育**を組み込む。

訓練方法

- 危険体感を安全に再現するワークショップを作る
- 受講者に「見せる→触らせる→理解させる」プロセスを体得
- 実技での指導は一回一回**演出**として扱う

受講者が体感して学んだ瞬間、知識は**脳に刻まれる**。

5. ユーモアと質問力

（コミュニケーション専門家の視点）

笑いも S ランク講義の武器。

受講者が笑う瞬間、緊張はほぐれ、理解力が上がる。

訓練方法

- 各講義に必ず2回以上**笑い**を入れる
- 質問は**受講者に考えさせる**問いに限定
- 誰も答えられない質問は、**次への導入**に使う

ユーモアと質問で、講義は**生きた体験**になる。

6. 自己評価と反省（教育コンサルタントの視点）

S ランク講師は、自己評価を恐れない。

講義後のフィードバックは自分への**武器**になる。

訓練方法

- 講義後、必ず3つの質問を自分に投げる
 1. 今日の講義で最も伝わったことは？
 2. 改善すべき点は？
 3. 次回どう活かすか？
- 可能であれば、受講者や同僚から**匿名の感想**をもらう

反省は成長の源。S ランクへの階段はここから始まる。

7. S ランク講師育成のルーティン

1. 毎日の声と呼吸の訓練
2. アイコンタクトと観察力の強化
3. ストーリー作りの練習
4. 実技教育で体感を設計
5. ユーモアと質問の導入
6. 講義後の反省と改善

これを**3か月継続**すれば、

B ランク講師でも A ランクに変わる。

半年～1年でS ランクへの道が開ける。

8. 名物コーナー

全国講習あるある（S ランク育成版）

- 「棒読みで眠らせる講師」を見て、どう改善するか考える
- 「事故自慢講師」に対し、受講者が学べる形に変換する練習
- 「スライド地獄」に遭遇したら、導入と物語で救う方法を実践する

S ランク講師の特徴

- 現場体験を生きた物語にする
- 受講者を巻き込む演出力
- 一言で行動を変える質問力

9. 最後に

S ランク講師になるために必要なのは特別な才能でも資格でもない。

覚悟と継続した訓練だ。

今日から、

声を変え、間を作り、物語を作り、体感教育を練習する。

それだけで、あなたの講義は

受講者の人生に影響を与える講義に変わる。

安全教育の未来は、あなたの手の中にある。

「受講者が地獄だと思うダメ講師」

① 指名してテキストを読ませる講師

これ、受講者が一番嫌うやつ。

よくある流れ

- 「〇〇さん、読んでください」
- 受講者が読む
- 講師は座って聞いている

受講者の心の声

- 「それなら家で読める」
- 「講師いない」
- 「時間の無駄」

つまり

講師の仕事を受講者にやらせている。

これは完全に

講義放棄型講師

② 映像教材を流すだけの講師

これもよくいる。

- DVD
- 映像教材

- YouTube

ずっと流している。

もちろん映像自体は悪くない。

問題は

解説がないこと。

良い講師は必ず

- 見る前にポイントを伝える
- 見た後に質問する

つまり

映像 → 考えさせる

という流れを作る。

③ 関係ない自慢話が長い講師

これ、かなり多い。

よくある内容

- 昔の武勇伝
- 業界裏話
- 長い自慢

受講者はこう思う。

「それ、試験に出るんですか？」

安全教育で大事なものは

現場に関係ある話。

ダメ講師チェックリスト

- ☐ テキスト朗読
 - ☐ 受講者に読ませる
 - ☐ 映像流しっぱなし
 - ☐ 自慢話が長い
 - ☐ 法令棒読み
 - ☐ 受講者を見ない
 - ☐ 時間だけ消化する
- 3つ以上当てはまったら
地獄講師。

一流講師の逆パターン

ダメ講師	一流講師
読ませる	語る
見せるだけ	解説する
自慢	事故
一方通行	質問

ダメ講師診断シート

使い方

- 各項目を講義中に観察し、該当すれば「1点」をつける
- 合計点で講師の改善優先度を判定

1. 講義スタイルチェック

項目	チェック	点数
テキストを読むだけで説明する	☐	1
自慢話や過去の武勇伝ばかり話す	☐	1
受講者の顔や反応を見ない	☐	1
体験事例・現場例を使わない	☐	1
質問に曖昧に答える	☐	1
教材や設備の準備不足	☐	1
時間管理ができず講義が長引く／短すぎる	☐	1
受講者に関心を持たず一方通行の講義	☐	1
フィードバックや理解度確認を行わない	☐	1
安全ルールを自分流にアレンジして誤解させる	☐	1
最新情報や現場の変化を反映しない	☐	1
雰囲気や緊張感をコントロールできない	☐	1

合計点： _____ / 12

2. 判定基準

- 0～3 点：問題なし、概ね良好
- 4～6 点：改善が必要、特定分野に注意
- 7～9 点：要改善、早急に指導・研修を推奨
- 10～12 点：危険レベル、講師変更または集中研修必須

3. 改善アドバイス

点数範囲	推奨アクション
4～6 点	講義準備や受講者対応を強化。実技・事例の導入を増やす
7～9 点	S ランク講師による同行研修。フィードバック重視の改善プログラム実施
10～12 点	講師再教育または交代。教材作成・現場体験から再研修が必須

メモ

- この診断シートは**評価だけで終わらせないこと**が肝心
- 「改善→再評価」のサイクルを回してこそ、安全教育レベルは上がる
- S ランク講師育成にも応用できる、現場の最強ツール

ダメ講師改善プログラム + 実践研修カリキュラム

1. プログラムの目的

- ダメ講師の行動を「見える化」し改善
- S ランク講師に必要な指導力・現場対応力を習得
- 安全教育の質を全国水準に引き上げる

2. 改善ステップ

ステップ	内容	実施方法
STEP1：自己診断	ダメ講師診断シートで現状把握	講義後に自己採点・管理者チェック
STEP2：個別フィードバック	強み・弱点を明確化	S ランク講師または安全教育コンサルによる面談
STEP3：教材・講義改善	レジュメ、事例、VR/動画教材の見直し	指導ガイドラインに沿って更新
STEP4：体験型研修	VR・実技演習・危険予知訓練	受講者役を設定し、講師として模擬講義
STEP5：オンライン補強	AI 診断・オンライン講義で理解度確認	個別課題＋フィードバック送信
STEP6：現場同行指導	S ランク講師の実地指導	現場講義で直接指導、修正ポイント確認
STEP7：再評価	ダメ講師診断シートで改善度測定	点数・行動変化をデータ化、合格ラインをクリアで次ステップへ

3. 研修カリキュラム例（5日間モデル）

日程	内容	方法
1 日目	ダメ講師診断＆個別フィードバック	診断シート＋面談
2 日目	講義設計・教材改善	ワークショップ、VR教材導入
3 日目	模擬講義演習	受講者役を設定、実技指導＋動画撮影
4 日目	現場同行指導	Sランク講師が実地指導、改善ポイント即修正
5 日目	総合評価・改善計画策定	再診断＋改善点リスト化、次回講義への反映

4. 改善ポイント別アクション

ダメ行動	改善アクション
レジュメ読むだけ	話す順序・視覚教材を組み合わせ、受講者視線を意識
自慢話多い	事例中心に置き換え、共感を引き出す質問型指導
受講者見ない	受講者チェックポイント表を作成、1分ごとに目線確認
質問に曖昧対応	Q&A マニュアルを作成、想定質問を事前準備
フィードバックなし	模擬講義で評価表作成、受講者行動チェックを実施
現場経験不足	VR体験・危険予知トレーニングを追加、Sランク講師同行

5. 成果指標（KPI）

- ・ 講義改善率（診断シート点数減少）
- ・ 受講者満足度向上（アンケート）
- ・ 行動変容率（現場での安全行動の増加）
- ・ 講師 S ランク認定率（改善プログラム後に達成）

第 1 2 章

「あなたの講習が、一人の命を救う」

ある日、

講習が終わったあと。

一人の受講者が

講師のところに来た。

「先生、今日の話、怖かったです」

講師は少し驚いた。

怖がらせるつもりで

話したわけではなかった。

ただ、

現場で実際に起きた事故を

そのまま話しただけだった。

すると受講者は続けた。

「でも、よかったです」

「たぶん今日話を聞けなかったら、

自分も同じことしてたと思います」

講師は

何も言えなかった。

ただ、

「気をつけてくださいね」

それだけ言った。

講習の本当の意味

安全講習は、
資格を取るためのものだと
思われている。
しかし本当は違う。
安全講習の意味は、
未来を変えること
だ。

今日の講習で
一つの行動が変わる。
その行動が
事故を防ぐ。
その結果、
一人の人生が守られる。

事故の現実

事故は、
ニュースになるものだけではない。
むしろ
ニュースにならない事故の方が
圧倒的に多い。

現場で、

- ・ 指を失う
- ・ 足を骨折する
- ・ 落下する

そして、

二度と元の生活に戻れない人もいる。

事故は

一瞬で起きる。

しかし、

その一瞬の事故の裏には

必ず

小さな油断

がある。

その油断を止めるのが講習

講習の役割は、

その油断を

思い出させることだ。

「まあ大丈夫だろう」

その一言が

事故を起こす。

しかし、

講習で聞いた話を

思い出す。

「あ、あの講師が言ってた」

その瞬間、

人は手を止める。

安全帯をつける。

もう一度確認する。

そして、

事故は起きない。

講師の仕事

講師の仕事は、

知識を教えることではない。

意識を変えること

だ。

受講者が

「気をつけよう」

と思った瞬間、

講習は成功している。

一人でいい

安全教育で

大事なことがある。

それは、

全員を変えようとしなこと

だ。

100 人の講習で、

100 人が変わることは

ほとんどない。

しかし、

一人が変わる

ことはある。

そして、

その一人が

事故を防ぐ。

それだけで、

講習は

意味がある。

命は数字じゃない

安全の世界では、

よく数字が使われる。

事故件数。

死亡者数。

災害率。

しかし、

数字の裏には

必ず

一人の人生

がある。

その人には

家族がいる。

友達がいる。

待っている人がいる。

事故は

そのすべてを変えてしまう。

現場で働く人へ

もしあなたが

現場で働いているなら、

覚えていてほしい。

あなたの命は、

会社のためのものではない。

あなたの命は、

あなた自身と

あなたを待っている人のものだ。

だから、

無理をしないでほしい。

危ないと思ったら

止まってほしい。

安全確認を
面倒だと思わないでほしい。
それは
命を守る行動
だからだ。

講師へ
もしあなたが
講師なら、
覚えていてほしい。
あなたの講習を聞いた人が
現場に戻る。
そして
その現場で
危険な瞬間に出会う。
そのとき、
あなたの言葉を
思い出すかもしれない。
「そういえば
あの講師が言ってた」
その一言が、
事故を止める。
つまり、

あなたの講習は
未来の事故を止める可能性がある
ということだ。

講習は命の授業

学校には
いろいろな授業がある。

国語。

数学。

歴史。

しかし、

安全講習は少し違う。

安全講習は

命の授業

だ。

だからこそ、

退屈であってはいけない。

形式だけでも

いけない。

本気で

伝えなければならない。

この本を書いた理由

この本を書いた理由は
一つだけだ。

安全講習を

命を守る講習にしたい

それだけだ。

もしこの本を読んだ講師が、

講習の話し方を

少し変えたら。

もしこの本を読んだ受講者が、

現場で

一度立ち止まったら。

それだけで、

この本には

意味がある。

最後に

安全は、

特別なことではない。

毎日の

小さな確認。

毎日の

小さな注意。

それだけだ。

しかし、

その小さな行動が

命を守る。

もしあなたが

講師なら、

どうか忘れないでほしい。

あなたの講習が

誰かの命を

救うかもしれない。

そして

もしあなたが

現場で働く人なら、

覚えていてほしい。

今日も

無事に家に帰ること。

それが

本当の仕事の成功

なのだから。

— 完 —

あとがき

—この本を書いた本当の理由—

この本をここまで読んでくださったあなたに、
まず心から感謝を申し上げたい。

安全教育という世界は、
世の中ではあまり注目されない分野だ。
ニュースになるのは事故が起きた時だけ。
安全教育そのものが話題になることは、ほとんどない。
しかし現場で働く人たちは知っている。

安全教育が、
人の命を守っているということを。

私はこれまで、日本全国の様々な技能講習や特別教育を
受け歩いてきた。

受講者として座ることもあれば、講師として教壇に立つ
こともあった。

その中で、どうしても感じてしまうことがあった。

日本の安全教育には、
素晴らしい講習もあれば、
眠ってしまう講習もある。

いや、正直に言おう。

眠るどころではない。

「なぜこの講習が存在しているのか」と疑問に思うような講習も、残念ながら存在している。

- ・教科書を読むだけの講義
- ・スライドを延々と流すだけの時間
- ・現場のリアルとはかけ離れた説明

受講者の中には、

「早く終わってくれ」と思いながら時計を見る人もいる。だが、それでは安全教育の意味がない。

安全教育とは、

ただ資格を取るためのものではない。

明日も無事に家に帰るための教育である。

そして私は、逆の講習も見てきた。

教室が静まり返る講義。

受講者が前のめりになって聞く講義。

終わったあとに「勉強になった」と言葉が自然に出る講義。

その講義には共通点があった。

講師が、

本気だったのだ。

知識を教えるだけではなく、

受講者の未来を守ろうとしていた。

講師という仕事は、

決して目立つ仕事ではない。

拍手を浴びることも少ない。
賞をもらうこともない。
それでも、
講師の言葉が一つの事故を防ぐことがある。
講師の一言が、
誰かの命を守ることがある。
そう思ったとき、私はこう考えるようになった。
安全教育の世界には、
もっと**良い講義**が必要だ。
もっと
受講者の心に残る講義が必要だ。
そして、
もっと**講師を育てる教育**が必要だ。
この本は、誰かを批判するために書いた本ではない。
むしろ逆だ。
安全教育の世界には、
本当に素晴らしい講師がたくさんいる。
現場のことを誰よりも理解し、
受講者の命を守るために本気で講義をしている人たち
だ。
その人たちの姿を見て、
私は何度も感動した。
だからこそ、この本を書いた。

もしこの本を読んで、
「自分もっと良い講義をしたい」
そうしてくれる講師が一人でも現れたなら、
この本を書いた意味はあったと思う。
そしてもし、受講者としてこの本を読んだ人がいたなら、
ぜひ覚えておいてほしい。
安全教育は、
あなたを縛るものではない。
あなたを守るものだ。
現場で働くすべての人が、
今日も無事に家に帰る。
そのために安全教育は存在している。
もしこの本が、日本のどこかの講習を少しでも良くする
きっかけになったなら、
それほど嬉しいことはない。
最後に。
今日も全国の現場で働いているすべての人に、
心から敬意を表します。
そして安全教育に関わるすべての講師の皆さんへ。
あなたの言葉が、
誰かの未来を守っている。
そのことを、どうか忘れないでください。
吉田 峻

最後に

(この本を閉じる前に)

安全教育とは、
法律を守るためのものではない。
会社を守るためのものでもない。
資格を取るためのものでもない。
安全教育とは、

人が生きて帰るためのものだ。

現場には
危険がある。
重機が動き、
刃物が回り、
高所で人が働いている。
その中で、
今日も多くの人が仕事をしている。
そして誰もが、
当たり前のように思っている。
「今日も無事に終わる」と。

しかし、事故は
その“当たり前”が崩れた瞬間に起きる。
ほんの少しの油断。
ほんの少しの慣れ。

ほんの少しの確認不足。
その積み重ねが、
取り返しのつかない結果を生むことがある。
だから安全教育は存在する。
講習の時間は、
決して「退屈な時間」ではない。
それは、
未来の事故を減らすための時間だ。
そして講師の言葉は、
ただの説明ではない。
それは、
誰かの命を守るための言葉だ。
もしこの本を読んで、
一人でも講師が
「もっと良い講義をしたい」
そう思ってくれたなら。
もしこの本を読んで、
一人でも受講者が
「安全って大事だな」
そう思ってくれたなら。
この本の役目は
きっと果たされた。
どうか忘れないでほしい。

安全とは、
特別なことではない。
毎日、無事に家に帰ること。
それが安全だ。
そしてその当たり前を守るために、
今日も日本のどこかで
安全教育は行われている。
この本が、
その小さな一歩になれば嬉しい。

(本を閉じたあと、少しだけ思い出してほしい)
「今日も、無事に帰ろう。」

著者紹介

吉田 峻（よしだ しゅん）

労働安全衛生教育講師。



愛知労働局長登録教習機関 東海安全教習センター(株) 副実施管理者。

また、複数の労働局長登録教習機関にて技能講習講師を務める
これまで日本各地の技能講習や安全教育を受講者として
受け歩き、同時に講師としても教壇に立ち続けてきた。
その中で見てきたものがある。

教室で静かに眠る受講者たち。

ただ教科書を読み上げるだけの講義。

資格を取ることでしか目的にならなかった安全教育。
しかし同時に、受講者が身を乗り出して聞く講義にも出
会った。講師の一言で教室の空気が変わる瞬間。

事故の話に誰もが静まり返る時間。

講義の最後に「勉強になった」と言葉がこぼれる教室。

その違いは何なのか。安全教育とは本来、

命を守るための教育である。

本書『眠る技能講習 ダメ講習と神講習』は、
全国の講習を受け歩いた安全講師が見た、日本の安全教
育のリアルな姿をまとめた一冊である。

安全教育に関わるすべての人へ。

そして現場で働くすべての人が、

今日も無事に家に帰るために。

安全講師としての誓い

私は、安全教育に携わる者として、
常に次のことを心に刻みます。

一、

安全教育は単なる知識の伝達ではなく、現場で働く人の命と生活を守る行動につながるものであることを忘れません。

一、

講義の場では、受講者一人ひとりを尊重し、現場の経験と知恵に学びながら、共に安全を考える姿勢を大切にします。

一、

事故の事例を語るときは、その背景にある現実を真摯に受け止め、同じ悲劇を繰り返さないための教訓として伝えます。

一、

安全教育を形式的なものにせず、現場で実際に役立つ知識と意識を育てる教育を目指します。

一、

自らも学び続け、より良い安全教育を追求し続けます。

安全教育の目的は、講義を終えることなく、

現場で働く誰かが、今日も無事に家に帰ることです。

そのために、私はこれからも安全教育の現場に立ち続けます。

安全教育に終わりはない

最後に、
講師である私自身のことを、
一つだけお伝えしておきたい。
私は自分の講習を毎回録音し、
講習が終わったあとに AI で分析している。
教育の視点。
心理学の視点。
安全工学の視点。
そして現場監督や受講者の視点。
さまざまな立場から、
「本当に伝わる講習だったのか」
「事故を防ぐ説明になっていたのか」
それを客観的に評価し、
自分自身で検証し、改善している。
なぜそこまでやるのか。
安全教育には、終わりがいいからだ。
もし私が「これで十分だ」と思った瞬間、
現場はすでに次の機械や工法へ進んでいる。
事故は変化する。
機械も、工法も、現場も、
時代とともにどんどん変わっていく。

教育が止まれば、
現場の進化に負ける。
だから私は、教育を止めない。
私の教育が、現場の進化に
負けることがあってはいけない。
そう思いながら、
私は毎回、全力で講習に向き合っている。

安全は、知識ではない。

更新し続ける覚悟だ。

参考文献

安全衛生・労働災害関連

厚生労働省

『労働災害発生状況（労働災害統計）』

中央労働災害防止協会

『安全衛生のひろば』

中央労働災害防止協会

『新しい安全衛生管理』

厚生労働省

『労働安全衛生法』

厚生労働省

『労働安全衛生規則』

中央労働災害防止協会

『ゼロ災運動推進資料』

中央労働災害防止協会

『KY 活動の進め方』

労働政策研究・研修機構

『労働災害の現状と課題』

ヒューマンエラー・事故研究

ジェームズ・リーズン

『組織事故 — 起こるべくして起こる事故からの脱出』

日科技連出版社

James Reason

Human Error

Cambridge University Press

チャールズ・ペロー

『ノーマル・アクシデント — 複雑システムの罠』

日刊工業新聞社

シドニー・デッカー

『ヒューマンエラーは裁けるか』

東京大学出版会

Erik Hollnagel

Safety-I and Safety-II

Ashgate Publishing

教育学・学習理論

ジョン・デューイ

『経験と教育』

講談社学術文庫

David A. Kolb

Experiential Learning

Prentice Hall

Benjamin Bloom

Taxonomy of Educational Objectives

Longman

Malcolm Knowles

The Adult Learner

Routledge

教育心理学

ジョン・ハッティ

『Visible Learning（可視化された学習）』

教育出版

Robert Gagné

The Conditions of Learning

Holt, Rinehart and Winston

Richard E. Mayer

Multimedia Learning

Cambridge University Press

脳科学・記憶研究

ダニエル・カーネマン

『ファスト & スロー』

早川書房

John Medina

Brain Rules

Pear Press

安宅和人

『イシューからはじめよ』

英治出版

コミュニケーション・プレゼンテーション

ナンシー・デュアルテ

『スライド:ology』

オライリー・ジャパン

Garr Reynolds

Presentation Zen

New Riders

カーマイン・ガロ

『TED 驚異のプレゼン』

日経 BP

ストーリーテリング

Annette Simmons

The Story Factor

Basic Books

Robert McKee

Story

HarperCollins

参考資料

厚生労働省

労働安全衛生総合研究所資料

中央労働災害防止協会

安全衛生教育教材

建設業労働災害防止協会

安全教育資料

林業・木材製造業労働災害防止協会

安全教育テキスト

講師のための推薦図書

一より良い講義を目指すすべての人へー

安全教育の講師は、単に知識を持っているだけでは十分ではない。

人に伝える技術、理解を促す教育理論、そして人間の心理を理解する力が求められる。

本書の内容をさらに深めたい読者のために、著者が参考にしてきた書籍の中から、特に有益なものを紹介する。

1

『組織事故 — 起こるべくして起こる事故からの脱出』

ジェームズ・リーズン

日科技連出版社

事故研究の古典的名著。

「スイスチーズモデル」で知られる事故理論は、安全教育に関わるすべての人が理解しておくべき考え方である。

事故は一人のミスではなく、**組織の構造の中で起きると**いう視点は、安全教育の考え方を大きく変える。

2

『ヒューマンエラーは裁けるか』

シドニー・デッカー

東京大学出版会

事故の責任を個人に押し付けるのではなく、**なぜ人はその行動を選んだのか**を考える重要性を説く。

安全教育を行う講師にとって、ヒューマンエラーをどう伝えるかを考える上で非常に示唆に富む一冊。

3

『経験と教育』

ジョン・デューイ

講談社学術文庫

教育学の古典。

「人は経験を通して学ぶ」という考え方は、体験型安全教育の理論的背景となっている。

安全教育を単なる知識教育ではなく、**経験として設計する**ヒントが得られる。

4

『Experiential Learning』

David A. Kolb

Prentice Hall

体験学習理論の代表的著作。

- 経験
- 振り返り
- 概念化
- 実践

という学習サイクルは、技能講習や実技教育の設計に非常に有効である。

5

『Visible Learning（可視化された学習）』

ジョン・ハッティ

教育出版

800 以上の教育研究を分析した教育学の重要書。

どの教育方法が学習効果を高めるかを科学的に示している。

講義の改善を考える講師にとって、極めて参考になる研究書。

6

『Multimedia Learning』

Richard E. Mayer

Cambridge University Press

スライド・映像・図解などを使った教育の効果を研究した名著。

「スライドを多くすれば良いわけではない」

ということを科学的に理解できる。

技能講習のスライド設計にも応用できる。

7

『Brain Rules』

John Medina

Pear Press

脳科学の視点から、人がどのように記憶し、学習するかを解説した書籍。

特に

- 注意力は長く続かない
- ストーリーは記憶されやすい

という研究は講義設計に役立つ。

8

『TED 驚異のプレゼン』

カーマイン・ガロ

日経 BP

世界最高レベルのプレゼンテーションを分析した書籍。

ストーリー構成

感情の伝え方

スライドの使い方

など、講義にも応用できる技術が多数紹介されている。

9

『Presentation Zen』

Garr Reynolds

New Riders

プレゼンテーションデザインの名著。

シンプルで伝わるスライド作成の基本が学べる。

技能講習の資料作りにも役立つ。

『The Story Factor』

Annette Simmons

Basic Books

ストーリーテリングをコミュニケーションに活かす方法を解説した書籍。

事故の話や現場の体験を**記憶に残る形で伝える技術**を学ぶことができる。

最後に

講師という仕事は、
一度資格を取れば終わりではない。

常に学び続けることで、
講義は少しずつ進化していく。

もしこの本をきっかけに、
さらに多くの本を読み、
講義を研究する講師が増えたなら。

日本の安全教育は、
きっと今より良くなる。
そう信じている。

眠っているのは受講者ではない。
眠っているのは日本の安全教育かもしれない。

私はこれまで、全国各地の技能講習、特別教育、
安全衛生教育を受講してきた。
北海道から九州まで様々な教習機関を訪れ、講習を受け、
講師としても現場に立ってきた。
その中で私はある事実気づいた。

同じ技能講習でも
受講者が眠る講習と
受講者が前のめりになる講習がある。
私はそれをこう呼ぶことにした。
「ダメ講習」と「神講習」

本書では、
・受講者が眠る講習の共通点
・受講者を引き込む講師の技術
・現場の事故を減らす教育とは何か
・技能講習制度の課題
を、全国の講習を受け歩いた経験から解説する。

安全教育の目的は
知識を増やすことではない。
事故を防ぐことだ。

